【From Kobe　9 月　初秋の便り　青空を吹きわたる爽やかな風に気分も新た　.】

◆ *From Kobe　地球の気象異変をわが身のものとして　考えよう!!*

2016.9.5　by　Mutsu Nakanishi

西神戸の田園地帯も黄金色に色好きはじめ、果樹園では秋の収穫が始まりました　北神戸　淡河の里で

西神戸の初秋の味覚　イチジク・葡萄・梨　朝採りの出荷がたけなわ　　西神戸性海寺で.

さすがの酷暑も朝晩はめっきり涼しくなってきました。
真っ青に澄み渡る大空を　わやかな秋の風が吹き渡り、 蝶やアキアカネが山を渡ってゆく
里の田園は黄金色に色づき、 傾斜地の果樹園には　ブドウ・イチジク・なしなどの果実がいっぱい
また、新学期が始まった街の通りを　子供たちがかけてゆく
夏の喧騒から　ゆったりとした秋の訪れに「気分も新た」 新しい風にもふれたいなっぁと

◆　地球の気象異変をわが身のものとして　考えよう!!

2016.9.5.　by Mutsu Nakanishi

オリンピックに沸いた８月でしたが、やっと終わって静かになったというのが本音。
終わってみれば、芸能化した有名スポーツ選手の顔しか浮かばない。
高い放送権料を払っての「金や銀や銅やと」そればっかしのオリンピック放送はやめてもらいたいが、 次の東京はもっとエスカレートするのだろう。この現状路線のパターンは　東京への一極集中をさらに進め、次世代を担う日本先進化の取組をさらに遅らすことになるだろう。
「今のままのオリンピックは　もう役割を終えた」と感じるのは　私だけだろうか・・・・
政治も経済も　早く東京一極集中から脱して先進方向に舵を切ってほしいもの。

今月はぶつぶついうまいと思っていましたが、 ８月の報道「オリンピックそして東京都知事選・参議院選挙」などを聞くとやっぱり気になる。
おりしも　８ 月　日本各地では地球温暖化による台風・ゲリラ豪雨に雷など経験したことのない気象異変の猛威災害に日本各地が襲われ、平穏な日常が一瞬にして危機へと変わった。
流される映像と各地で日々頻発される集中豪雨の警報にその猛威のすごさは　他人ごとではない。
　都市洪水のすごさ　雷の猛威は年ごとにエスカレート。
　今までの防災設備と意識では守れない限界に近付いている。
　今もてはやされ始めている「物のインターネット（Internet of Things：IoT）」などは
　雷や都市洪水の前にはひとたまりもない。
　落雷による都市圏交通網の混乱と同じことが、都市社会全般にさらに拡大してゆく。

「地球規模の巨大災害が　ますます拡大してゆく時代に入った」と専門家は指摘する。
経験したことのない環境変化が進む中で、「ストップ ザ 温暖化」はもう無理。　でも軽減・防備への対策行動は今　スタートしないとますます厳しくなる。
「限られた資源をどこに投入すべきか」は政治・国の大きな方向性「理念と資質」にかかわっている。
今　世界も大きく舵を切り始めたこの問題に「無作為な言葉の連呼」だけでは何も変わらないのである。
原因はもう後戻りできない毎年の海水温の上昇。
スピードを加速しつつ、今世紀末には気温が４℃も上昇するといい、専門家たちはもう現実として、もとに戻すことはできぬという。
100mm/hr を越える局地的集中豪雨　猛烈な突風　そして　すさまじい落雷などが引き起こすすさまじい脅威が 日本のいたるところで　その激しさを増しつつ、突然に何度も人それぞれに襲いかかる。
差し迫った危機がもう始まっている。　そして　今ひとり一人の生き方に直接かかわっている。
オリンピックに名を借りた東京投資など　目先と仲間内ばかりに　うつつを抜かす場合ではないのである。
年寄りといえども　厳しい時代がすでに始まっていることを認識して 前向いて生き抜かねばと。
次世代を担う若者たちにも時代に迎合することなく　未来をみつめ　自分の立ち位置をしっかりと。

この脅威の中で　すでに被災された皆様に一日も早く救援の手が差し伸べられ、
立ち直られますよう。 また、新しい方向転換が一日も早く始まるよう声をあげねば・・・・・・と。
おぼろげですが、何か不安をいだきつつ、もやもやしていた中身を知って
頭をガツンと打たれた思いでいます。

今 世界で起こっていることに自ら向き合おう。
先月　掲載した平和憲法擁護の立場から、「自らと向き合って　事実を知る努力を」と説く
法政大学田中優子総長の意見とも　その根のところで　相通ずると思える。

何もできなかった今年の８月でしたが、夜静かに ネットサーフィンしながら
考えさせられてしまいました。

2016.9 月　暮らしに思いをはせて　by Mutsu Nakanishi

◆　再集録　「自らと向き合って　事実を知る努力を」
法政大学田中優子総長の意見　「国民投票に備える　改憲論議　事実知る努力を」より
「理想や理念の創造力よりも　政治の技術を重視し、誇り、
それに頼ってことを進めているように見える　」
神戸新聞　2016.8.1.　朝刊「識者の視点」　法政大学総長田中優子氏の意見文より

２０１６．８月掲載分の再録　「自らと向き合って　事実を知る努力を」

８月　自らと向き合って　平和の危機「憲法九条を守ろう」　より

法政大学田中優子氏の憲法論議についての視点のご紹介

2016.8.1.　From Kobe　by　Mutsu Nakanishi

８月１日の神戸新聞の朝刊の「月曜オピニオン　識者の視点」の欄に掲載されていた

法政大学田中優子総長の意見文　「国民投票に備える　改憲論議　事実知る努力を」との記事に目が留まった。

今の政治を「**理想や理念の創造力よりも　政治の技術を重視し、誇り、それに頼ってことを進めているように見える**」と述べられている。

いろんなことが去来する８月　　仲間・家族　そして社会のこと等々。でも　毎日がなんとわなしに過ぎてゆく。

そのありがたさを感じつつも、見聞する社会の激しさ・異常さ・地球環境変化の おそろしさなど先行きへの不安感は増大の一途を。　そして「国際・グローバル化」の衣に包んで　ひたひたと進む戦争への踏み込みが急速に進む勢い。

刹那的な今の利しか追わない政治が多数派を占め、　平和主義憲法の砦「憲法九条」の危機が現実のものに。

いつも　選挙のたびに　感じていましたが、　今度ばかりはついに少数派　ほんとなんか…　こんなに多数派の人たち婆多いのか・・・・・とそのギャプの大きさに意気消失。

最近は　多数派ではないなぁ…と感じることの多いシルバー世代　　自分の身の置き所のなさに無力感ただよう。

若者が老練な政治に翻弄されているように見えて仕方がないのですが、　どうせ　年寄りのボヤキ　口はだすまいと。

そんな８月の初め　ふと見た新聞に法政大学田中優子総長の意見文

「国民投票に備える　改憲論議　事実知る努力を」の記事が目に留まり、勇気づけられました。

(今の政治)は「理想や理念の創造力よりも政治の技術を重視し、誇り、
それに頼ってことを進めているように見える　　」
「国民投票に備える　改憲論議　事実知る努力を」　と。

神戸新聞　2016.8.1.　朝刊　「識者の視点」欄　法政大学総長田中優子氏の視点より

田中優子氏の視点の私の理解は次の通り。

今まさに政治・憲法論議の転換点にあるこの時にも

「今の政治家たちは創造力・知恵のなさをひた隠し　政治の職人たちの政治手法に多数の人たちがたぶらかされてしまっている」との視点と読みました。　今の政治家が一番隠したいことに、ズバーと切り込む鋭い視点である。

「平和憲法を守る」というと　まるで骨董品のように、そんなことで平和が守れるか?と門切り型の攻撃が来る。
　でも　日本が戦後著しい復興を遂げ、繁栄を謳歌できるまでに成長できたのも　戦争に巻き込まれなかったことによることが大きい。昨今の周辺諸国を見るだけでも　明らかですが、多数派はこれを評価しない。
　またぞろ「そんなことで　国を守れるか・・」とほかのことでは「個人・個人という」連中が　異口同音　国を持ち出す。何か信用ならぬ裏があると感じるのは　私だけか・・・・・。
　また、縄文人は厳しい生活の中で　世界に類を見ない１万年を超える永続社会を維持し続けたたことが明らかになっている。　ここにもまた、平和を愛する日本人の心・知恵が生きていることに世界が注目する。

「日本の縄文ぐらい　勉強すればいいのに」と思うのですが…・

今は受け継ぐ政党もなくなった革新少数派。　多数派の思うがままに　少数派の力がますます封じ込められている、

そんな　少数婆の意見の中にこそ、しっかりとした時代を見つめる視点・正論がうずもれている。

今　声をあげねば・・・・・。

少数派・多数派どちらにもくみせず、冷静に今も分析するに憲法論議のスタート論・視点

是非　憲法論議　平和を考える視点として　一読・一考をとご紹介。

次ページに　神戸新聞に掲載された田中優子氏の視点を転記させていただきました。

◆　神戸新聞　2016.8.1.　朝刊記事「識者の視点」の記事

法政大学総長田中優子氏の意見文　　「国民投票に備える　改憲論議　事実知る努力を」

参考になればと記事を転載させていただきました。

月曜オピニオン

識者の視点

改憲論議 事実知る努力を

国民投票に備える

法政大総長　田中優子氏

米大統領選でのトランプ氏人気、過激派組織「イスラム国」（IS）が絡むテロの拡散、英国の欧州連合（EU）離脱方針など、世界は共存から対立へ大きく動いている。その中で日本では先の参院選の結果、自民、公明の与党に一部野党を加えた「改憲勢力」が、非改選を合わせて全議席の3分の2を超えた。

憲法96条は改正について「各議院の総議員の3分の2以上の賛成で、国会が、これを発議し、国民に提案してその承認を経なければなら」ず、国民投票で「過半数の賛成を必要とする」と定める。改憲の意志と草案を明確に持つ自民党が、他党との調整は残るものの、その発議権を手にしたというのが今回の参院選の意味である。自民党がこの好機を逃すはずがない。国会発議と国民投票はおこなわれるだろう。

政治の職人

EU離脱を決めた英国の国民投票を思い出す。離脱が国民経済にどんな結果をもたらし、何が起こるのか、よく分からないまま、あるいは間違った情報を鵜呑みにして投票し、「後悔」した人々が少なくなかったという。「改憲勢力」に投票した日本の方々は当然、自民党の改憲草案を読んでいただろう。だが一方で、無作為に聞いた人々の半分以上が「3分の2」というキーワードを知らなかったとの報道もあった。背筋が寒くなる話だ。

自民党の改憲草案では、天皇を象徴から元首に変え、国防軍を創設し、家族を基盤とする国づくりを打ち出している。公明党は、改憲ではないかのように「加憲」という表現を使うが、自民党草案も9条の部分は9条2項「国防軍」、9条3項「領土等の保全」などの「加筆」が大半である。公明党の「加憲」はどう違うというのか。

改憲と経済が別々の争点であるかのように受け取る人もいる。両者を無関係に見せかけているのは、政治手法だ。どうやら今の自民党には政治の「職人」がいる。理想や理念の創造力よりも政治の技術を重視し、誇り、それに頼ってことを進めているように見える。

むろん、アベノミクスの経済効果を期待して投票した方々は、その経済成長路線が、改憲草案の国家像を前提にしたものであることなど、とっくにご存じなのであろう。

たなか・ゆうこ　1952年横浜市生まれ。法政大大学院修了。2014年4月から現職。専攻は近世文学、アジア比較文化。著書に「自由という広場」「江戸百夢」など。05年紫綬褒章。

連携の象徴

共存から対立へ、世界が動く背景には権力構図の変化がある。米国は世界の方向を決める力を失いつつある。実際、イラク戦争以降、問題を広げるばかりで制御できていない。そこで、だいぶ前から米国は「連携強化」という名の「囲い込み」を強めている気がする。

その象徴が沖縄だ。日米両政府の沖縄への執着は、そこに暮らす人々の協力を得られるのか、という大きな問題を含めて、基地としての適否を現実的に検討するだけの冷静さを欠いている。そしてその背後には多くの日本人の無関心があり、世界の米軍基地の現状や周辺の暮らしに対する多くの米国人の無関心がある。

連携強化の象徴が沖縄だとすれば、その要は改憲にある。「日本独自の憲法に」と言う政治家がいるが、本気だろうか？　日本にしかない、新しい世界の方向を示す憲法とは、今の憲法のことである。自民党が目指している憲法とは、米国の求める連携強化の中で生まれた、君主と軍隊を持つ「普通」の憲法である。

政治家だけが国や社会をつくるわけではない。いま必要なのは、政治家や官僚に丸投げ、おまかせにしない姿勢である。外国人の差別や排斥、好戦的な世相が今後も強まっていくようなら、それは政治の技術に私たちが乗せられているからだ。政治の現場では、国内の格差問題を他国に責任転嫁し、国民の排外感情をあおるということが平然とおこなわれる。意図的に戦争準備に入ることで、大企業による「戦争経済」を活性化しようとする。

スペインに「反うわさ戦略」という運動があるそうだ。「移民のせいで医療費がふくらんでいる」など、多様な問題の責任を移民に転嫁しようとする言説を集め、データで検証し、事実を国民に知らせる。いま私たちに必要なのは、こうした姿勢ではないか。事実を知る努力を続け、事実を周知することによって、事実無根のうわさと責任転嫁を排除する。そして、国民投票に備えるのである。

2016.8.1. 神戸新聞朝刊より転載